

読み終えたあと、とても清々しい気持ちになる脚本でした。

故郷、倉敷の街並みを思い浮かべながら読み進める物語。

登場人物の想いに心を馳せながら、ページを捲るのが楽しかったです。

僕もかつてこの物語に出てくる高校生たちと同じ、高校生という厄介な時期を倉敷で過ごしました。

目の前の現実から逃げ出して、学校をサボって大原美術館に行ったこともありました。

今から思うとずいぶん贅沢な逃避行だな、とも思いますが、そんな貴重な街並みや文化に囲まれて過ごせたことに今は感謝しています。

これから映像化するにあたり、主人公たち高校生があああの街を走り、語り、悩み、心を振るわせるのが楽しみでなりません。

きっと、素敵な作品になると思います。

僕も、「希望」を持って取り組みたいと思います。

前野 朋哉

すべてを平松監督にゆだねます。

橋爪功